

(海外最新事情)

イギリス

(1) 紅茶文化の衰退

英国における「伝統的な紅茶」の消費量が減少しているらしい。ここで言う「伝統的な紅茶」とはハーブ・ティーやフルーツ・ティーなどを除いたいわゆる英国で昔から飲まれている紅茶のことである。『タイムズ』2005年5月18日号に‘Coffee and fizzy drinks are now our cup of tea’ という標題の記事があった。この標題の‘our cup of tea’ というのは「私たちの好むもの」という意味である。英語で‘one’s cup of tea’ というのはよく使われるイディオムであり、たとえばある女優について‘She is not my cup of tea.’ と言うと、「(あの女優は) 私の好きなタイプではない」という意味だ。この『タイムズ』の記事では、このようなイディオムに使われるほどに英国の文化に深く根ざした‘tea’ という飲み物に代わって、コーヒーや炭酸飲料が英国人にとっての‘our cup of tea’ になりつつある、ということを伝えているのである。

この記事によると、過去二年間で英国における「伝統的紅茶」のティーバッグの売り上げが16パーセント、ルース・ティー (loose tea: 袋に入っていない茶葉) のそれが9パーセント減少したという。1999年には紅茶の総売上が年間7億700万ポンドだったのに対して、2004年には6億2300万ポンドに落ち込んでいる。ミネラルウォーターや清涼飲料の普及のために紅茶を飲む習慣が若い世代に根付かなかったことが影響していると考えられている。

一方でカフェインを含まないハーブ・ティーやフルーツ・ティーの売り上げは50パーセントも上

昇している。これらは特に若い世代に洗練されたイメージの飲み物として好まれていることに加えて、伝統的紅茶は通常牛乳と砂糖を入れて飲むために脂肪分と糖分の摂取を避けられないので敬遠されて、このような「健康的な」茶が好まれていることがその理由である。また珈琲の台頭も無視できない要因であろう。確かに20世紀末ころから英国の主要都市にスターバックスやコフィー・リパブリックといった珈琲店が急速に数を増やし、紅茶よりも珈琲を好む若者が増えていることは事実である。

それでも英国国民の80パーセントは習慣的に紅茶を飲んでいて、この数値は65歳以上に限定すると85パーセントになる。15歳から24歳では75パーセントに留まるが、それでも決して小さい数値ではない。別な統計によれば、英国全土で一日に二億杯以上の紅茶が飲まれているという。第二次世界大戦が終わって以来、紅茶に限らず様々な英国の「伝統」が衰退していると言われて久しいが、この数値を見る限り紅茶に代表される「伝統」はそれほど柔なものではないように思われる。

(2) 地球温暖化が伝統的ファーストフードに及ぼす影響

地球温暖化 (global warming) の影響で、北海に棲息する魚類がより冷たい水を求めて北上していることが明らかになった。2005年5月13日の『インディペンデント』の記事によれば、過去25年の間に cod や haddock (いずれも鱈の一種) といった「商業的に重要な魚 (commercially important fish)」を含むおよそ15種類が、その棲息域を北に移しているという。コッドやハドックがなぜ「商業的に重要」なのかといえば、これらは英国の伝統的ファーストフードであるフィッ

シュ・アンド・チップスの二大定番メニューだからである。

コッドの棲息域はこの四半世紀で73マイル（約117キロ）北上し、ハドックの棲息域の南限も65マイル（約104キロ）北に移動した。イソギンポ（snake blenny）に至ってはその南限が250マイル（約400キロ）も北上したという。小型で寿命が短く、ライフサイクルが短い種類ほど北上の度合いも大きいらしい。一方で bib（小型の鱈）や scaldfish（小型のヒラメ）など、元来は北海よりも南に棲息していた種類が北海まで北上して来ている。イースト・アングリア大学の海洋生物学者アリスン・ベリー博士は、このままでは2080年までに北海からコッドが完全にいなくなりビップばかりになる、と話している。

北海に棲む魚類の棲息域北上は年間平均して1.4マイル（約2.2キロ）ずつ進んでいるという。この速度は、蝶や鳥や高山植物が同じく温暖化の影響で北上している速度の4倍らしい。地球温暖化がこのまま進めば北海の水温は2020年までに平均して0.5度から1度上昇し、さらに2050年までに1度から2.5度、その後2080年までに4度上昇すると推測されている。2080年のフィッシュ・アンド・チップス店にコッドはあるのか、それともビップに取って代わられているのか、あるいはマクドナルドやケンタッキー（さもなくば現在の私たちが想像もしないような新奇のファーストフード店）に淘汰されてこのような伝統的ファーストフード店自体がなくなってしまっているのだろうか。フィッシュ・アンド・チップスは私の好物でもあるので、英国の伝統はそれほど柔ではないと信じたい。（安藤 聡）

ドイツ

日本におけるドイツ年について

「日本におけるドイツ年」というものを皆さんはご存知でしょうか、これは正式には「日本におけるドイツ2005/2006」といって、2005年から

2006年にかけて精力的に日本においてドイツの紹介を行う企画です。300件を超える実に多様な催しが計画、あるいはすでに実行されていて、ここではすべてを紹介することは不可能ですが、そのなかからいくつかを紹介したいと思います。この企画の全体あるいは個々の企画のさらに詳しい情報を知りたい方は、公式ホームページ（http://www.doitsu-nen.jp/index_JA.html）を参考にしてください。

まず現在のドイツの文化活動を紹介する試みとしては、先端のデザイナーたちの仕事を集めた「ドイツ・デザイン・ラボ」や、日本ではなかなか見ることのできなかつたドイツ映画を一挙に集めた「ドイツ映画祭2005」があります。

しかしドイツの魅力は何といっても芸術の分野にあります。美術、すなわち造形芸術に触れたいという人にお勧めなのが、「ベルリンの至宝展」（東京国立博物館 4 / 5 ~ 6 / 12, 神戸市立博物館 7 / 9 ~ 10 / 10）と「ドレスデン国立美術館展」（兵庫県立美術館 3 / 8 ~ 5 / 22, 国立西洋美術館 6 / 28 ~ 9 / 19）です。「ベルリンの至宝展」は、世界有数のコレクションを楽しむだけでなく、戦火のなかで惜しくも焼失、紛失してしまった数々の傑作や、略奪の対象になるなど戦争に翻弄された美術品の数奇な運命について思いをめぐらす機会にもなるでしょう。

また「ドレスデン国立美術館展」は、ドイツ有数の歴史を誇るコレクションを紹介するものです。このコレクションが現在の建物に移ったのは1855年のことですが、すでに1560年（！）に宝物室が整備され、1722年には総目録が完成して、18世紀の後半には外国人旅行者や美術アカデミーの生徒に観覧が許されていたという伝統あるものです。このコレクションの持ち主であるザクセンのヴェッティン家は有力な一族でありながら、プロイセンのホーエンツォレルン家やバイエルンのヴィッテルスバッハ家のようにドイツの覇権をめぐる争いに野心をもたず、内政に専念することによって国力の充実を図りコレクションの充実にも努めたのです。

もちろん音楽や演劇に関しても盛りだくさんの企画が用意してあります。たとえば名門バイエルン国立歌劇場によるズービン・メータ指揮の『タンホイザー』、『ニュルンベルクのマイスタージンガー』や初来日のシュツットガルト歌劇場によるコンヴィチュニー演出の『魔笛』、これらは定番中の定番ですが、その他世界最古のオーケストラであるゲヴァントハウス管弦楽団のメンバーによるライブツィヒ室内管弦楽団などさまざまな管弦楽団、室内楽団による公演が各地で予定されています。

また演劇ではベルリナー・アンサンブルによるプレヒト作『アルトゥーロ・ウイの興隆』、ベルリン・シャウピューネによるトーマス・オスターマイアー演出の『ノラ』などの公演も準備されています。

すばらしい企画が盛りだくさんですが、いくつか残念な点があります。一つは非常にドイツらしい欠点ですが、それは広報活動が十分ではないということ、これらの企画のうちでいったいどれくらいのものが一般の人に知られているのかと思うと非常に心もとないものがあります。もう一つは、これは逆にドイツらしからぬ欠点で、ほとんどすべての企画が東京を中心とする首都圏（一部は神戸）に集中しているということです。これは地方分権の伝統を持ち、何事にも一極集中・中央集権を嫌うドイツ人らしからぬことであり、それだけにいっそう残念に思われます。それでも一見の価値のあるものばかりですから、東京などに出かける機会があればぜひ足を運んでみてください。

(島田 了)

けないが、ヨーロッパではほとんど毎日のように何らかの記事が報道されている。

ご存知のとおり現在 EU は、アルファベット順に、オーストリア、ベルギー、キプロス、チェコ、デンマーク、エストニア、ドイツ、ギリシャ、フィンランド、フランス、ハンガリー、アイルランド、イタリア、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、マルタ、ポーランド、ポルトガル、スロバキア、スロベニア、スペイン、スウェーデン、オランダ、英国、となっている。これだけの国が、一つの経済圏（ただし、英国、デンマーク、スウェーデンはまだ通貨統合していない）としてだけでなく、政治上も一体となろうとしている。そのためにはどうしても憲法が必要である。まさしく EU 発足以来の悲願といえるだろう。

ところが、EU 発足から拡大へ向けて、先頭に立って奮闘してきたフランスが、EU 憲法批准のための国民投票で、大ピンチに陥っている。3月18日に行なわれた世論調査では反対派が賛成派をほんのわずかに上回るという結果が出てしまった。

反対派の意見もさまざまである。EU 憲法に批准してしまうと、フランスの主権が失われてしまう、といった EU 発足当時から言われている意見から、国会議員のスキャンダル（フランスも日本に劣らず国会議員のスキャンダルが多い）に対する批判票やさまざまな内政政策に対する不満票としての反対票など、EU 憲法批准の是非とは関係のない理由による反対まで多種多様で、実際には確固とした反対の論拠は見当たらない。むしろ、「フランスがなくなって EU になってしまう」といった漠然とした不安が反対ムードを作り上げているように思える。

しかし、万一フランスの国民投票で EU 憲法批准が否決されてしまうと、シラク大統領のメンツがつぶれることなど小さなことだが、今後の EU の舵取りが難しくなってしまうことは明らかだ。EU 内でのフランスの発言力は当然下がるだろう。フランス国民が EU 憲法を認めないまま、フランスが EU 内でどのような役割を果たすことが出来るかと考えただけで、この国民投票で反

フランス

EUとフランス

—EU憲法はフランス国民投票で批准されるか—

フランスで今最も注目されているのは EU（欧州連合）憲法が批准に必要な過半数を5月29日のフランス国民投票で獲得できるかどうか、だろう。日本では EU の話題は比較的地味な扱いしか受

対が成立すれば、フランス一國に留まらず、ヨーロッパ全体、ひいては世界の政治体制、経済体制への影響が少なくない。EU憲法批准の是非については、フランス以外でも反対が成立する可能性がある国があるが、フランスの行方の重大さは誰しもが認めるところである。

個人的には、結果的には僅差でフランス国民投票でも批准されるのではないかと予想している。3月の世論調査でも実は半数以上が棄権を表明していて、果たして3月の時点で棄権を表明していた人が本投票でどの程度ほんとうに棄権するのかは何ともいえないが、結果的には賛成に回る国民が多いのではなからうか。あまりに甘すぎる予測だろうか。(中尾 浩)

P.S. 5月29日の国民投票でフランスはEU憲法批准を否決した。

韓国

磁気浮上式リニアモーターカー： 実用路線化へ向けて着々

愛知万博を機に、藤ヶ丘と万博八草駅を結ぶ路線9kmの「リニモ」が本年3月に開通した。これは、我が国で初の磁気浮上式リニアモーターカー実用路線であるが、世界では、2004年1月に中国の上海で開通した、空港と都心を結ぶ32kmの路線について2番目である。ともに常電導磁気吸引式であるが、「リニモ」はHSSTと呼ばれる方式で最高時速が100kmほどなのにはたいし、上海のものはドイツで開発されたトランスラピッド方式を輸入したもので最高時速430kmで走ることができる。

ところで、いま、韓国では世界で3番目の磁気浮上式リニアモーターカー（韓国語では「磁気浮上列車자기부상열차」）の実用化に向けて着々と準備が進められており、5月10日に、大田の韓国機械研究院한국기계연구소の試験路線1.3kmで、関係者やマスコミの記者らを招待して試乗会が開催された。これは、現代自動車グループの鉄道車両系列社ロテム로템と機械研究院が共同開発した

もので、1993年の大田エキスポの時に会場内に設置されて12万人余りが利用したが、その後IMF危機で開発が中断されたのち、国策事業として選定されて開発が再開されたものだというのである。方式は「リニモ」と同じで最高時速は110km、2両1編成、定員は1両当たり135名。

この実用化路線の第1号は、大田の大田エキスポ公園と国立中央科学館を結ぶ1kmで、本年10月1日に着工、2007年4月に開通することが予定されている。そこでの実地試験を経て2009年ないし2010年には各地の市街地での運行がはじまるということである。なお、列車の名前は公募して決めることになっている。

付け加えれば、ロテムは昨年すでに、マレーシアやインドネシアなどにこの列車を輸出しようとしたが、実用路線での運行実績がないため契約を結ぶにいたらなかったという。次世代交通手段の技術でドイツや日本に従属しないためにも、韓国国産の技術による磁気浮上式リニアモーターカーの実用路線化が急がれている。(田川光照)